

薬史学会通信

No.7 1988年11月

〒192-03

東京都八王子市堀之内 1432-1

東京薬科大学内

日本薬史学会事務局

昭和 63 年度総会より

会長挨拶

日本薬史学会々長

野上 寿

皆様御多忙中の所総会に御参集下さいまして有難う御座います。

私共は前年度に引きつづき役員、評議員一致団結して会の民主化、近代化、活性化に取り組んで参りました。未だ大きな成果は挙っておりませんが一步一步着実に進んでゆきたいと思っております。御協力をお願いいたします。

それでは、これから62年度の活動について簡単に御報告申し上げます。

昨年4月3日、薬学会第107年会と合同の形で、「薬史学部会」として、講演会を開催し、一般講演9題並びに「日本近代化期における京都とくすり」と題するシンポジウムを

開催し、好評を博しました。又お昼休みを利用して総会を開くことができました。ついで10月3日に集団会を明治薬科大学野沢校で開催、大槻真一郎教授の「薬学史の文献資料研究を通して見たもの」と題する御講演の後、明薬資料館を見学し、明薬で作られた薬学史のビデオ2巻を鑑賞致しました。

次ぎに皆様に喜んで載きたいことが御座います。それは「薬史学会文庫」の開設であります。これは明薬の中野学長、大塚理事長らの御好意によるもので、世田谷校の一室を拝借して「日本薬史学会文庫」の名の下に薬史学関係の文献や資料を収集し、会員の閲覧に供するものであります。皆様の御支援を得て

薬史学会集談会のお知らせ

(日 時) 1988年11月19日(土) 13:30~15:30

(場 所) 東京渋谷、薬学会館403(B)室

(講 師) 堀岡正義氏(日大薬・教授)
(および) 戦後の調剤学の変遷(假題)

山川浩司氏(東京理大薬・教授)

有機薬化学の歩み(假題)

発展を図りたいと存じます。

扱て、3月31日をもって役員
の任期が終了致しました。新ら
たに役員人事を決定して載きた
いと存じます。次に事務局を東
京薬科大学に移したいと存じま
す。事務局は学会設立以来30有
余年に亘り、日大薬学科生薬学
教室に置かれていましたが、こ
の度、日大薬学科が学部にも昇格
して習志野に移転されることに
なり、その準備で多忙を極めて
おられ、これ以上御迷惑をお掛
けするわけには行かないと思う
からであります。事務局の移転
に伴い、事務分掌の体系を整備
したいと存じます。その他、会
則の一部を変更したいと存じま
す。何れも会の運営を円滑にす
るための改革であります。

私は1昨年4月会長に就任し
て以来、鋭意会の発展に努力し
て参りましたが、幸、役員評議
員各位の御協力と賛助会員の御
支援の下に、大過なく任期を全
うし得ましたことを感謝致しま
す。

以上を持ちまして私の御挨拶
を終ります。

会員の異動

	前年度	資格変更		入会	退会	計
		+	-			
名誉会員	1	1				2
賛助会員	22			4		26
一般会員	226		1	19	7	237
学生会員	0			1		1
外国会員	4					4
計	253	1	1	24	7	270

昭和62年度決算

収入の部

	予 算	決 算	増 減 △
前年繰越	687,566	687,566	0
賛助会費	660,000	540,000	△120,000
一般会費	1,130,000	920,000	△210,000
学生会費	0	2,000	2,000
外国会費	20,000	17,000	△ 3,000
投稿料	200,000	229,786	29,786
広告料	60,000	60,000	0
雑誌販売	10,000	23,190	22,190
雑 費	2,000	0	2,000
利 子	3,000	3,019	19
寄 付	0	30,000	30,000
計	2,772,566	2,721,271	△ 51,295

支出の部

	予 算	決 算	増 減 △
印刷費	1,750,000	1,167,383	△582,617
通信費	100,000	87,450	△ 12,550
事務費	50,000	110,002	60,002
雑 費	150,000	123,600	26,400
計	2,050,000	1,488,435	561,565

繰越残 1,232,836

昭和63年度予算案

収入の部

	前年度	予 算	増 減 △
前年繰越	687,566	1,232,836	545,270
賛助会費	660,000	780,000	120,000
一般会費	1,130,000	1,185,000	55,000
学生会費	0	2,000	2,000
外国会費	20,000	20,000	0
投稿料	200,000	200,000	0
広告料	60,000	60,000	0
雑誌販売	10,000	10,000	0
雑 費	2,000	2,500	500
利 子	3,000	3,000	0
計	2,772,566	3,495,336	722,770

支出の部

	前年度	予 算	増 減 △
印刷費	1,750,000	1,750,000	0
通信費	100,000	100,000	0
事務費	50,000	60,000	10,000
雑 費	150,000	200,000	50,000
計	2,050,000	2,110,000	60,000

繰越残 1,385,336

(5) 中国薬物文化の伝来

宗 田 一

わが国原始呪術医方にかわる役目をはたしたのが、朝鮮半島渡来の“韓医方”(7世紀)で、東亜文化圏の中国医学の影響下に形成された医薬学であった。それは仏教文化の伝来と重なってもたらされたことに注目しておかねばならない。旧呪術にかわる仏教という新呪術がそこにあり、またこの仏教には道教が混在していて、その影響が多面的だったことが近時注目されている。

文化背景

B.C.206年、秦の始皇帝による最初の中国統一のあと、しばらく続いた秦を倒した前漢・後漢の出現と、それによる朝鮮半島の大部分の支配下にあつて、わが国はまだ統一国家が成立していなかった。しかし、『後漢書』における奴国王、『魏志倭人伝』の卑弥呼など、つねに朝鮮半島の楽浪、帯方の2郡を介して、中国王朝との政治的接触が保たれていて、大陸文化の流入がみられていた。

3世紀のはじめ、後漢が倒れてその支配力が弱まるとともに、高句麗・新羅・百済などの古代国家が成立し、三国時代となった。このころようやく国内統一に成功した大和王朝は、南朝鮮半島への外交を伸長するようになり、4～6世紀中葉までは朝鮮半島との関係に重点が移るようになった。こうして朝鮮半島から新しい文化、技術の流入が盛んとなり、わが国古墳時代発展の原動力となった。この場合、とくに渡来系氏族による貢献は大きい。

韓医方の伝来

わが国の正史にみられる韓医方の公式伝来は、新羅から薬方のくわしい医師を招いて天皇の疾をいやした(414年)とあるのが初見で、

また雄略朝3年には百済より良医・徳来が渡来し、その子孫は難波薬師(ナニワノクスシ)の姓を賜わって医を業とした。欽明朝14、5年(553-4)には、医博士の交代在留を百済に依頼し、医博士・王有陵陀とともに採薬師の潘量富・丁有陀が多く薬物を携えて渡来し、ここに薬学専門技術者の公式出現がみられる。

しかし、6世紀に入ると、大和王朝と朝鮮半島との交渉は行き詰りをみせ、欽明朝23年(562)に高句麗と戦った大伴連狭手彦を大將軍とする日本軍が帰国するとき、呉の孫権の末裔と称する知聡一族が多く薬典や医書を携えて渡来した。この知聡の子善那使主(福常)はのち孝徳朝(645)に方書・薬白を献じ、牛乳を搾って薬餌として天皇に献じた。天皇はこれを嘉し善那に和薬使主(ヤマトノクシノオミ)の姓を賜わり、子孫は代々これを姓とした。

日鮮医薬学の交渉の詳細については、三木栄『朝鮮医学史及疾病史』医歯薬出版(1963)が現在日本語で読める最もすぐれたものである。ただし、従来の日本側の記録に対し、朝鮮側記録によって補正ないし訂正が一般史においてみられるので、そのような新しい史観による日鮮関係史が医薬学史領域でも求められよう。

薬猟のこと

薬猟とは、その名が示すように、薬用のシカの若角(鹿茸)を採る行事で、正史に初見する5月5日の端午の節の行事としてみられるものである(推古朝19年<611>)。

ところが、この行事は中国の端午のそれに

みられないものであるので一言しておきたい。

この薬猟行事のときの服装は、定まった冠位の服と冠色をかぶるものであった。

わが国最初の冠位制度は、推古朝11年（603）に定められた「十二階冠位」であるが、これは推古朝8年の最初の遣隋使が百済の仲介で中国の礼制を摂取するのを主目的としたものとされる。

このとき定められた冠位は、中国儒教の徳目に普通となえられている五常の序列の「仁義礼智信」の順位ではなく、五行説の「木火土金水」に対応する「仁礼信義智」の順位を採用し、その上位に「徳」をおいて、これらの6位をそれぞれ大小に分け12階とする制度を採っている。

これを従来、聖徳太子が定めた独自のものとする見解があったが、最近では朝鮮半島の百済の官位制を中心とし、これに高句麗のそれを参照することによって成立したものとする見解が有力視されるようになってきた。とくに色の配当については、五行説の五色によって、木＝青、火＝赤、土＝黄、金＝白、水＝黒を採用、それに最上位の徳に紫を配したものと考えられてきたが、これに対しても否定的見解で、そのような具体的な色は必ずしも明らかとはいえないとされ、とくに徳冠を紫色とするには批判的で、紫色は冠位外のものであろうという。

このように、推古朝に初見する冠位制が朝鮮の三国時代の影響下に成立したものとする近時の見解からみても、中国の端午の節の行事に登場しない薬猟行事が、わが国の端午の節の初見行事に登場していることは、薬猟のルーツも朝鮮半島に求めねばならぬだろう。

和田萃は朝鮮半島の狩猟儀礼を次のように紹介している。

平岡王（平原王）の治世下（559—90）の高句麗の宮廷儀礼に、シカやイノシシを狩って天と山川の神々を祭祀する会猟があり、毎

年3月3日に楽浪之丘で行われたとする

（『三国史記』巻45）。

これは、狩猟を行って天や山川の神々を祭祀する遊放騎馬民族の儀礼に、楽浪・帯方郡など朝鮮四郡の設置で、これら地方に居住した中国人の習俗が結びついて成立したものとみられ、史料は残っていないが5月5日にも同様の儀礼が行われた可能性がある。こうして、楽浪・帯方郡の遺民が百済を経てわが国に数多く渡来したし、高句麗からの渡来人も多かったから、このような儀礼が受容された可能性は十分考えられる、という。

大陸医学の受容

推古朝を画期として大陸文化の積極的摂取は、大陸への公式使節派遣によって促進された。7世紀前半から9世紀にわたる遣唐使の派遣は、およそ16回が実際に行われた。それに同行した学問留学僧の大陸渡航、さらに渡来中国人系氏族などを軸として積極的・組織的な受容が行われた。

大化改新のあと大化3年（647）に、冠位を唐制に倣って「七色十三階冠位」、さらに同5年に「十九階冠位」、さらに天智天皇称制3年（664）に「二十六階冠位」に改正されたのは、その現われの一端を示すものだった。

導入した隋唐の医学は、中国医学の発展期に当たり、医療制度は高度の発達を示し、組織的な医学教育制度（分科制）をもち、唐制に倣った律令制下の医事制度は、大宝律令の「医疾令」（701）で定められ、医療関係役人の任用・考課、諸学生の教育・課試、薬園の運営、採薬・投薬など、医療全般にわたる諸規定が定められた。医師の読むべき本草書のテキストは『神農本草經集注』7巻で、平安時代の延暦6年（787）5月に『新修本草』に代えられるまで使われた。

隋唐の方書では、散、丸、煎（エキス剤）、膏などの薬方が前代にくらべて増え、これら

は煎薬にくらべて貯蔵できる点で、予製しうるものであって、薬剤の配置薬化を促進する。

一方、製剤化のための製薬具も多彩となり、秤・斗・升・合・鉄臼・木臼・絹羅・紗羅・馬毛羅・刀砧・王槌・盜鉢・大小銅銚・鑊・釜・銅鉄匙等が数えられる。しかし、後代に最も普遍的な製薬具である薬碾(薬研)はまだ登場していない。これは、当時の薬末化が擣くことで達せられていたからで、薬碾の出現は唐代における石薬製剤(鈹物薬)の需要が増大することにながされ、唐末から出現して宋代にかけて次第に普及するようになった技術革新の一つであった。

(参考文献)

- 1) 黛弘道：冠位十二階考、東大教養部紀要 17、(1959)
- 2) 原田淑人：冠位の形態から観た飛鳥文化の性格、『東亜古文化論考』所収、吉川弘文館(1962)
- 3) 井上光貞：冠位十二階とその史的意義、日本歴史 176 (1963)
- 4) 三浦三郎：冠位七色十二階制と紫根染、日本薬学会94年会・薬史部会報告資料(1974)
- 5) 野村忠夫『律令官人制の研究(増訂版)』吉川弘文館(1967)
- 6) 武光誠：冠位制の展開と位階制の成立、『日本古代国家と律令制』吉川弘文館(1984)

薬史学会文庫の充実について (お願い)

すでにお知らせしておりますように、薬史学会に関心をお持ちの方々が、落付いて調査・研究を進めて頂けるように、明治薬科大学のご好意を得て開設いたしましたのが『薬史学会文庫』です。そこで同文庫の内容を充実させるため、皆様お手持の文献資料などのご寄贈をお願いする段階になりました。

つきましては次の要領で、会員各位のご厚意を受けることになりましたので、宜しくお願いたします。

(1) 薬史学会文庫へご寄贈の意志を持たれる方は、図書名、資料名などを書翰で事務局あてにご郵送下さい。

(2) 従来の例から考えられますことは、同一書籍(資料)の申込みが多数になることであります。この場合は、各位のご意志に感謝しつつも、当方で選ばせて頂く事になりますのでご了承下さい。

(3) 事務局では、選定委員会のような仕組みを作って適切な処理を行なう予定です。

(4) ご寄贈受入れ図書(資料)などの決定を見て、ご本人にその旨通知申し上げますので、発送のご準備をはじめして下さい。送料などについても、ご通知の際ご相談いたします。

(5) 文庫への搬入後、学会内部でとり決めた方法に従って処理を行った後、一般の閲覧に供することとなります。(K)

日本薬史学会・'88、'89年度役員

会長：野上 寿

幹事：青木允夫、石坂哲夫、伊藤和洋、

宗田 一、長沢元夫、難波恒雄、

西岡五夫、根本曾代子、

江本龍雄*、大槻真一郎(新任)*、

滝戸道夫*、山田光男*、川瀬 清*

監事：田辺 普

*は事務局構成員

名誉会員：木村雄四郎、吉井千代田

〔薬史学博物館めぐり〕

千葉県立

房 総 の む ら

千葉県印旛沼のほとり、白鳳の秘仏で知られた竜角寺の近くに、体験博物館『房総のむら』が建設されていますが、その町並の一角に薬の店・佐倉堂が建築され、88年10月1日より開かれました。

この『房総のむら』は、伝統的生活様式や生活技術を実物や実演で再現し、入場者にも直接体験してもらって、より豊かな地域文化の創造に役立てようとする県立博物館で、江戸時代に視点を定めて人々の生活を再現すべく、商家・農家・武家屋敷など、すべて新築されたものです。

薬の店・佐倉堂は間口3間、2階建て、一階はお店、2階は展示室、現在は「東下総の膏薬」というテーマで、実物、古文書などが解説つきで展示されています。

入館無料、月曜日はお休みです。交通はJR成田線安食(あじき)下車、バス約5分、駐車場完備。

〒270-15 千葉県印旛郡栄町竜角寺1028
千葉県立・房総のむら 0476(95)3333

「漢方の臨牀」

目で見る漢方史料館

漢方の臨牀誌では昨87年8月号より、目で見る漢方史料館と題し、口絵グラビア写真印刷の形で連載がはじまりました。各号とも北里大学・東洋医学総合研の小曾戸洋氏、真柳誠氏らが解説を加えて、関係の文書、器物などにつき、中国や日本にある珍しいもの、貴重なものを居ながらにして見る事ができます。近年、考古学的発掘が進み、通史の文章の変更を要するような成果も出されています。本シリーズでも、専門家だけしか目に触れない情報に接することができるようになりました。

東アジアの伝統医学史に関心を持つ方は、この項に気を配っておく必要があります。

編 集

○会長のご挨拶にもありましたように、本年から事務体制および事務局も改められ、新たな出発となりました。郵便物等で未だ事務引継ぎがスムーズでなく、会員の皆様にご迷惑のかゝっている例もあり申しわけなく思っております。何かありましたら、ご遠慮なく事務局までお申出下さい。

○木村雄二郎前会長の時代から、日本大学薬学科生薬学教室には大へんお世話になりました。同科が薬学部にご昇格され、お喜びするとともに、厚く御礼いたします。

○機関誌・紙の強化は最重点の課題であります。学術水準を向上させて、他の科学技術史系の学会のレベルに達するよう努力するとともに、誰でも薬史学に興味を持って頂ける

後 記

よう紙面・内容に工夫を凝らす必要があります。野上会長は、その点の目論みもおありのようで、編集委員会は会長直接のご指導を仰ぎつつ仕事を進めております。

○薬史学会集談会は、現代史に継がる課題が話されます。演者の堀岡正義先生は、ずっと九州大学病院薬剤部長をしてこられ、薬史学へのご造詣は、同院薬局内に酒井甲太郎先生を記念する史料展示室を作られたほか、先生の著書も活動も常に歴史的視点に立っておられることで判ります。

東京理大の山川浩司先生も古くからの本学会員で、最近では南江堂より出版の「有機化学」最終章を、有機化学の歩みで結ばれています。本集談会も新規格の一つです。(K)